

福音を語り、福音に生きる

(使徒二〇・一七〜三五)

「重要なのは人生の長さではない。人生の深さだ（エマーソン・哲学者）」
 「人生は長さじゃない。深さです。幅です。（金子大栄・仏教学者）」
 東西を問わず同じことが語られているということは、この主張には相応の蓋然性があるのだろう。確かにぶつと不完全燃焼を繰り返して、有害ガスをまき散らして居穢く生き続けるより、真つ赤（青）に燃えて事をなした方がよい人生のようにも思える。

閑話休題。使徒パウロは旅の人であった。主の命を受け、聖霊の導きのままローマ帝国の諸州を駆け抜けた彼は一つの教会に定住したことは多くない。せいぜいコリントに一年半、エペソでは三年といった具合である。しかし期間は短いとはいえ、パウロがそこで密度の濃い伝道をしたことは間違いない。実際三年に渡るエペソ滞在時にはそこでの伝道に加え、コリント、ピリピ、ピレモン、コロサイの諸教会に手紙を書いて教え、励まし強めたのだ。今朝はパウロの決別説教として有名なこの箇所から伝道者のなすべきことについて二つ学びたい。

一、福音を語る

一九節で自らのしたことを主に仕えたことと概観したパウロは続く二〇、二一節においてそれを具体的に述べている。そこに書かれているのはためらわずに人々を教えたことであり、その内容は神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰であった。興味深いのは「益になることは少しもためらわず」という表現である。そもそも相手の益になることであればためらう必要などはないとも考えられるからだ。だが相手にとって益なることが相手を喜ばせる保証は必ずしもない。愛煙家諸氏にタバコの害を伝え、禁煙を呼びかけることは彼らの健康には有益ではあるが、それを彼らが喜ぶ保証はないのがその一例である。福音を語ることもそれに似ていてストレートに悔い改めを迫ったり、試練や苦難を神の訓練と言うことは相手の心情を逆なでしかねないのだ。だがパウロはそういうことを恐れずどこでも誰にでも福音を語った。彼には人にどう思われようなどというおセンチな思いは無かった（参：一テサ二・四）。あるのはただ神に仕え主を喜ばせようという鉄の意志であり、また告知することで福音を知らないまま死んでしまう人がいないようにしなければという断固たる決意であった。

二、福音に生きる

このようにパウロは福音を語り、教えることを自らのライフワークにしたのだが、彼の福音宣教は決して「いいお話」で終わるものではなかった。三三〜三五節を読めばそれがよく解る。特に三四節の「この両手は」という表現には心揺さぶられる。使徒一八・三などを見ればパウロが天幕作りの仕事をしながら伝道をしたことが書いてあるし、エルサレム教会の経済的苦境が伝えられるとパウロは自分が伝道した教会で献金を募り、届け、またその働きを異邦人クリスチャンがなすべき奉仕の務めとする神学さえ構築した（参考・ロマ一五・二五〜二七）。ではなぜパウロは逍遙学派の哲人たちのように回廊を歩きながら知に興じることせず、天幕を作り、募金をかき集める労を担ったのだろうか。その答えは簡単だ。彼は単純に主イエスのご命令、「受けるよりも与える方が幸いである」に従ったのだ。福音の本質は愛だ。だとすればそれが語る者の生活ににじみ出てきてはじめて本物となる。愛の人イエスを語るのなら、イエスを生きなければ伝わらない。いやイエスを生きずにはおられない。そういう思いでパウロは生きた。それは逍遙とは対極の愛の労苦を伴う「生活」であり、その中にパウロの福

音は息づいていたのだ。

* * *

七年七カ月。短いとも、長いともいえない年月であるが、その年月は福音を語った日々の累積であった。礼拝、早天礼拝、婦人集会、バイブルスタディと毎週休まず聖書に取り組み、福音を語った。そうした取り組みの中で主は私たちに途切れることなく受洗者を与えて下さった。また福音に生きるという面では多くの人の悩みを聞くだけでなく、実際に弱い者を助けるべくボランティアなどに励み、またベテル教会が目を外に向けて善き業に生きるよう模範を示してきた。冷静な目で見れば出来なかったこと、足りなかったこと、また人を傷つけたことも多々ある。申し訳ない限りだ。だが悔いはない。やるべきことはやったという一定の安堵がある。これは成長させて下さった善きお方である主が与えた賜物だと確信する。愛する兄弟と共にこの教会を建て上げられたことは喜びであった。また皆さんの寛容と忍耐の富にも感謝をしたい。そして苦小牧でもベテルでも私たち全員がそれぞれの場所で「福音を伝え、福音に生きる」ものであり続けられるよう、聖霊の力を求めて祈り続けていこうではないか。アーメン。